

国際会議

6th International Conference on Human-Computer Interaction (HCI International '95)

第6回人間とコンピュータの関わり合いに関する国際会議

主催：日本人間工学会、情報処理学会、計測自動制御学会、電子情報通信学会、(財)パブリックヘルスリサーチセンター

日時：1995年7月9～14日（6日間）

会場：横浜国際平和会議場（Pacifico YOKOHAMA）

参加者：747人（外国から27か国、161人）

発表数：口頭発表357、ポスター120

梅雨は明けても、まだまだ過ごしやすかった夏のはじめに、横浜みなとみらい21地区にある会場で、表記の国際会議が開催された。会場周辺には、ランドマークタワーや帆船日本丸などの横浜名所、更に横浜駅/山下公園へ向かう水上バスや遊覧船の棧橋が隣接し、港横浜の風情をも楽しめる場所である。

この国際会議は、ヒューマンインタフェースに関する幅広いテーマを含んだ学際的な会議で、計算機科学、認知科学、人間工学、心理学、労働医学、社会学等のさまざまな分野からの研究が発表される。2年に1回、欧米を中心に開催されていたが、第6回目の今回は、アジアで開催される初めてのヒューマンインタフェースの国際会議となったそうである。

日程は、7月9～10日がPre-conference tutorials、7月11～13日が口頭発表/ポスターによるTechnical sessions、7月14日がTechnical toursであった。

最初2日間のPre-conference tutorialsには、ヒューマンインタフェース設計手法、評価手法などをテーマにした、全日または半日日程の17コースが用意された。情報通信網やCD-ROMタイトルを利用した、視覚に訴えるサービスが一般的になっている現状から、マルチメディアのためのヒューマンインタフェースを題材にする講義が多かった。仮想現実をテーマにした、Kay Stanney氏（Central Florida大学）の講義では、仮想現実のシステムを利用することで引き起こされる疾病、サイバーシックネスの問題が紹介された。吐き気、めまい、頭痛などの乗り物酔い症状と、視力低下、肩こり、目の疲れ、方向・速度感覚の混乱などがサイバーシックネスの症状である。この原因、対処法はまだ解明されていないが、克服されない限り仮想現実を用いた産業は成功しないであろうという指摘があった。

中3日は、朝一番の全員参加セッションと、引き続き口頭発表/ポスターセッションで構成された。

朝のセッションには、連日、著名な講演者が招へいされて、朝寝坊の参加者をも早朝から会場に向かわせる効果があった。初日講演のMarvin Minsky氏は、ヒューマンイ

ンタフェースの未来について述べ、現在の仮想現実で用いられる手段は更に進化して、10年程度の未来には、筋肉、神経電位を利用するようになり、20～30年後には脳表面接触、その後、脳直結のインタフェース技術が登場すると語った。また、脳が多数の手法を協調させて常識を実現していることに着目すると、21世紀には、一つの最適解をみつけるのではなく、十の最適解をどう利用するかが、計算機科学のテーマになるであろうと述べた。

口頭発表/ポスターセッションは、9の会場で並列に行われた。34か国から551の論文応募があり、口頭発表357、ポスターセッション120が採択されたそうである。内容は、ヒューマンインタフェース設計・評価、仮想現実、マルチメディア、娯楽、知的・協調作業支援、ユーザの心理学・認知科学的計測などのテーマをカバーしている。計算機科学の分野では、完璧な仮想現実や認識技術を競う発表のほかに、現実世界との協調を目指した仮想現実やユビキタスコンピューティング、アナログ情報のままでの利用などをテーマにしたユニークな発表が多く、興味深かった。日ごろの研究活動へのインスピレーションを刺激される有意義な3日間であったと思う。

少し残念だったのは、日本の物価高と、災害・テロの報道の影響のためか、外国からの発表者、特に東欧/旧ソ連圏からの発表キャンセルが目立ったことである。口頭発表で7%、ポスターで20%程度のキャンセルがあった。但しこれは、近年日本で開催される国際会議としては平均的な状況だそうである。

最終日は、日産、NTT、NHK、電力中央研究所、都立リハビリテーションセンター、SONY、慶応大学、日本IBMを訪れるTechnical toursが開催された。ほかに、外国からの参加者向けに、生け花、茶道、着付け、折り紙などを体験してもらうイベントがあり、また、バンケットでは、和太鼓と琴の演奏があり、好評であったとのことである。会場では、缶入り飲料、パン、コーヒー、紅茶などが、休憩時間に無料で提供され、参加者同士のなごやかな交流の場となった。また論文集と一緒に、鞆、文房具、記念品などが配布された。これらの一部は、企業からの寄付でまかなわれたとのことである。

次回第7回目は、HCI International '97として、米国サンフランシスコで、1997年8月24～30日に開催される予定である。照会先は、salvendy@ecn.purdue.eduである。なお、二分冊で合計2000ページ以上になる、ハードカバーの発表論文集は、以下の出版元から入手可能である。

“Symbiosis of Human and Artifact.” Y. Anzai, K. Ogawa, H. Mori (Editors), Elsevier Science Publishers, 1995, (ISBN: 0-444-81795-6)
(執筆者) 椎尾一郎：日本アイ・ビー・エム株式会社東京基礎研究所